も近きやうに定めたるものを$\overline{x_l}$とすれば、$\overline{x_l}$が即ちA_lの公定價格として採用すべきものなり

但しA_l等の中の一つは円其者にして例へばA_1をそれとすれば$x_1=1$は最初より定まれるものなり。

○公定價格を決定したる以上之を以て買上げ行ふ際其買上量は各地方に應じて差等を設け配給も亦其品種を地域毎に違へるが上策なり即ち同じ物品ならば價格を低く評價する地方より買上げ高く評價する地方へ配給するなり　地域別の主觀價値（平均）を知るには其地域内にて前系の方法を用ふればよし

○此他買上配給に当りては輸送を容易ならしめる如く考慮する必要あり

○尚主觀價値は政治的に變動せしめ得るものなり故に適当なる政治によりて國民の主觀價値を國家の願望と等しきやうに示導する事は經済政策の最要点なり

5. 人生数学

○　数学の本領は量的判断にあり　判断は処世の根本なり判断の正格は量的計測の精密による。数学が人生の根本知識をなす所以なり

○　処世上の判断とは論ずる所優劣の判断なり

○・物の状態は其れのもつ各因子即ち原素的なる諸量所謂一般座標によりて定まる甲乙二物が夫々座標（$x_1\ x_2\cdots\cdots x_m$）（$y_1\ y_2\cdots\cdots y_m$）にて定まるとき、甲乙の優劣を定むる一般の法則は或函数

$$f(x_1\cdots x_m;\ y_1\cdots y_m)$$

が正ならば甲優り負ならば乙優ると云ふ如き形にて与へら

る

此場合注意すべきは優劣が必ずしも線状ならず即ち甲より乙、乙より丙が優れたるとき必ずしも甲より丙が優れたりとは云ふべからざる事なり

されども

$$f(x_1 \cdots x_m ; y_1 \cdots y_m) \text{ と } f(y_1 \cdots y_m ; x_1 \cdots x_m)$$

とは必ず符号相反すべきなり

f を優劣函数と呼ばん

○　優劣函数が

$$f(x_1 \cdots x_m ; y_1 \cdots y_m) \equiv g(x_1 \cdots x_m) - g(y_1 \cdots y_m) \qquad (1)$$

なる形をもつときは優劣は線状なり

$g(x_1 \cdots x_m)$ を物 $(x_1 \cdots x_m)$ の價値函数と呼ばん

優劣函数が (1) の形をとる場合に限り物が単独なる價値をもつなり　一般には二物を対比して優劣を生ずるのみにて単一物に一定の價値を評價する事は不能なり

例へば甲乙二国の戦争状態に関する優劣は双方の戦争座標（戦意、戦術、戦資等を尚細分せる多数の座標より成る）の優劣函数にて定まる必ずしも線状ならず　即ち甲乙戦ひて甲勝ち乙丙戦ひて乙勝つべき場合にも甲丙戦はゞ勝負の決必ずしも定まらざるなり　此時優劣函数が (1) の形をもてば其場合の g を以て其国の戦力と呼ぶなり、戦力増强等の語を用ふるは此假定に立つ勿論近似的には此假定は正しきなり

○　今後物の優劣に関して論ずる場合には常に (1) の成立するものとし價値に引き直して考ふるものとす。